

タイトル	スロボジャンシチナという地域
著者	寺田, 吉孝; TERADA, Yoshitaka
引用	年報(19): 2-7
発行日	2022-12-25

スロボジャンシチナという地域

寺田 吉孝

少し前までクルスク駅（クルスク方面への列車が発着する駅：モスクワ市内にある）からクリミア（ロシア語およびウクライナ語ではクリム）へ行く列車があった。モスクワを出て、クルスク、ハルキウ（ロシア語ではハリコフ）、ザポリヅジャ（ロシア語ではザポロージェ）を経て、クリミアの中心都市シンフェローポリに到達する。1泊2日の楽しい夜行寝台の旅が可能だった。この路線の列車に初めて乗ったのは、1997年の夏である。とはいっても、逆方向のハルキウからモスクワまでの10時間ほどの乗車だった。その年は、北海学園大学、北海道大学、札幌医科大学の学生達16名とともに、ヴラデーミル大学に1か月ほど滞在した。学生たちをモスクワのシェレメーチエヴォ空港で見送った後、個人旅行を企てた。旧ソ連圏以外への初めての旅行だった。ロンドンに長期滞在中の友人を訪問し、数日泊めてもらい、ロンドン観光の後、ウクライナへ行く予定だった。ヒースロー空港に到着後、友人宅に電話を何回かけても応答がなかった。しかたなく宿を探すことにした。普通のホテルの代金がヴラデーミル大学の学生寮

の宿泊費の100倍近くしたので、比較的安価なロンドン大学の学生寮に泊まることにした。ロシアもイギリスも夏休みには学生たちが郷里へ帰ったり旅に出たりする。空いた寮の部屋は、一般の旅行者へ開放される。かなりの節約となった。しかし、ロンドンの物価は高かった。2日でイギリスを脱出した。その後、フランス、イタリヤ、ギリシア、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、ポーランドを経由してウクライナへ。さらに、ウクライナのリヴィウ（ロシア語ではリヴォフ）、キーウ（ロシア語ではキエフ、ウクライナ語ではクィーイウあるいはクィーイフあるいはクィーイヴ、英語ではキーヴ）、ポルトワを経由して目的地のハルキウに到着した。

ハルキウ訪問の目的は、旧知のハルキウ電子通信大学准教授のマリーヤ・バシキエロヴァ先生を訪問すること、ハルキウの言語状況を視察すること、さらに、数年後に予定していた在外研修先の大学の目星をつけることだった。マリーヤ先生とは、1990年にモスクワのプーシキン大学留学中に知り合った。この時は、マリーヤ先生以外にも、旧ソ連（ロシア、ウクライナ、カザフスタンなど）、ブルガリア、ブラジルなどの先生方とお知り合いになった。その方々とは、それ以降もお付き合いさせてもらっている。というか、ずっとお世話になっている。1997年のハルキウ滞在中は、マリーヤ先生のお宅に泊めていただいた。食卓に置かれた燭台に大きくて立派なロウソクが立てられていた。ロウソクの灯りで夕食をとるなんてロマンチックだなと思った。しかし、実情は異なっていた。当時のウクライナでは、暗くなってからでも突然停電することがあるので、ロウソクが準備されていたのである。ロシアからお友達価格で購入していた天然ガスの支払いさえも滞るなど、当時からウクライナの財政はひっ迫しており、電力供給も儘ならなかった。

その後、ハルキウには、1999年、2005年、2010年に長期滞在をしたが、その折にも、マリーヤ先生には何かとお世話になった。2022年のロシア軍のウクライナ侵攻後、マリーヤ先生は消息不明である。また、2005年に滞在していたアパートは破壊されたと聞く。1999年と2010年に滞在していたアパートはどちらも破壊を免れているようだが、近隣の建物にミサイルが撃ち込まれている様子をテレビで見た。

ハルキウにいた知り合いの多くは、海外（オーストリア、フランス、ルクセンブルグなど）やウクライナ国内の比較的安全な場所へ避難されているが、ハルキウに留まっている方もいる。また、夏以降、避難先から自宅に戻る方々も増えている。安全になったから戻るのではなく、お金が尽きたから戻るということである。

タイトルにあるスロボジャンシチナ（ロシア語ではスロボジャンシナ）の中心がハルキウである。スロボジャンシチナとは、ウクライナ北東部とヨーロッパ・ロシア南部の地域につけられた歴史的地名である。ウクライナ北東部（ハルキウ州の大部分、スームィ州の南東部、ルハンシク（ロシア語ではルガンスク）州およびドネツィク（ロシア語ではドネツク）州の北部）とヨーロッパ・ロシア南部（ベルゴロド州の大部分、クルスク州南部、ヴォロネジ州西部）に位置するこの地域は、「荒野」と呼ばれるほぼ無人の地域（遊牧騎馬民族の通り道）の時代が長く続いていた。この地域は、ロシアによって領有された16世紀頃から、ポーランドとウクライナ・コサックの戦いが続く右岸ウクライナ（ドニプロ（ロシア語ではドニエプル）川よりも西のウクライナ）からの避難民やロシア帝国からの移民などが定住し、

現在に至っている。言語的にも、文化的にも、ウクライナとロシアが混在している地域である。

ソ連邦の初期からロシア共和国とウクライナ共和国の国境がスロボジャンシチナの中ほどを通っている。この地に国境線を引いた合理的な理由があるのかよく分からない。知り合いの中に、家はウクライナ側、畑はロシア側にあったという人もいる。住民たちは国境線の存在を意識していなかった。しかし、ソ連崩壊以降は、国境をまたいで行き来するのがかなり困難になったという。そして、2022年の2月以降、この地域でロシア軍とウクライナ軍が戦っている。

スロボジャンシチナは、当然ながら、ロシア語とウクライナ語のバイリンガル地域であるが、ウクライナ国内の大半もまたバイリンガル地域である。ウクライナではモノリンガル地域は少ない。ウクライナ語のモノリンガル地域が最西部ハルィチナー（ロシア語ではガリツィア：中心城市はリヴィウ）、一方ロシア語のモノリンガル地域が最東部のルハンシク州とドネツィク州の東部に限定されている。残りのウクライナは、様々な程度のバイリンガル地域である。例えば、「普段ロシア語しか話さないが、ウクライナ語は聞いてわかる」、一方「普段ウクライナ語しか話さないが、ロシア語も聞いてわかる」等であるが、前者に近い地域の方が多い。大雑把に言って、ドニプロ川以東では、東へ行くほどロシア語が優勢になる。ドニプロ川以西（オデーサ（ロシア語ではオデッサ）、ムィコライウ（ロシア語ではニコラエフ）やゼレンスキー（ウクライナ語ではゼレンシクイイ、ロシア語ではゼレンスキイ）大統領の出身地クルィヴィーイ・リフ（ロシア語ではクリヴォーイ・ログ）などの南ウクライナを除く）では、西へ行くほどウクライナ語が優勢になっていく。

しかし、ここで注意しなければならないのは、必ずしも、「ロシア語話者」親露派」ではないというこ

とである。ロシア語を話していても親欧米派の人は多い。実際に、テレビでインタビュされるウクライナ兵の多くはロシア語を話している。一方、「ウクライナ語話者＝親欧米派」は、ほとんどの場合当てはまる。

ところで、砲弾が飛び交う中でハルキウに留まっている知り合い（ハルキウ大学元准教授リユドミィラ・ベイさん）からの情報によると、2022年の春以降、ハルキウの街でウクライナ語を耳にすることが以前よりも増えたとのことである。ロシア語からウクライナ語へのコードスイッチの兆候なのかもしれない。また、夏以降は、ポーランド語訛りのウクライナ語（西部のハルイチナーのウクライナ語）も街で耳にするようになったという。

ハルイチナーは、キエフ・ルーシ（ロシア、ウクライナ、ベラルーシの共通の起源となる国家）の他の地域とかなり異なる歴史を歩んできた。キエフ・ルーシは、13世紀以降、モンゴル、リトアニア、ポーランドによつて3つに分割され、併合された。しかし、18世紀末以降、キエフ・ルーシの元の土地のほとんどは、ロシア帝国によつて併合されていった。一つ残された地域がハルイチナーである。ハルイチナーは、14世紀以降、ポーランド（ポーランドがオーストリア、ドイツに支配されたことがあったが）によつて支配され、第2次世界大戦が終了するまで、ロシア（あるいはソ連邦）に属したことがほぼなかった。例外的に、1939年の独ソ不可侵条約（モロトフ・リッペントロップ協定）の秘密議定書締結後から1941年の独ソ開戦までの1年10か月間のみ、ハルイチナーはソ連邦の領土となったことがある。このように、ハルイチナーは、14世紀から20世紀までの600年近くの間、カトリック国ポーランドに支配された。そのため、宗教的、言語的にポーランド化された。宗教は、東方正教からグレコ・

カトリック（正教の典礼に従いながらもローマ法王に従うというもの）に改宗され、さらに、言語もポーランド語の要素の強いウクライナ語となった。

なお、ウクライナ語の標準語はウクライナ中部ポルタワの方言を基にしているが、ポルタワの都市部では、日常的にロシア語が話されている。ウクライナ語が話されているのは、主に農村部である。

ウクライナ国内の言語状況はだいた右記の通りだが、ウクライナの公用語はウクライナ語のみである。ロシア語はマイノリティーの言語の一つでしかない。1991年のウクライナの独立以降、ウクライナ政権はウクライナ語とロシア語の関係に慎重な態度をとっていた。2012年になつてはじめて、一部地域においてロシア語に地域言語としての地位が与えられた。しかし、2019年にその地位が取り消され、現在、ロシア語は何の地位もない言語となっている。

1997年、はじめてハルキウ・モスクワ間の夜行列車に乗った時のことを思い出す。のどかな風景だったこと、同室となったウクライナ人男性のことを思い出す。彼は、ロケット（ロシア語でラケータ…「ミサイル」の意味もある）の設計技術者だったが、ソ連崩壊後は、縫製工場の経営をしているとのこと。モスクワへ商談に向かうところだった。

スロボジャンシチナは、ロシアとウクライナをまたぐ地域である。共通の風俗、習慣、伝統を有する地域である。現在進行中の戦争の終結後、ロシアとウクライナの関係修復のために、何らかの役目を担う地域となることを願う。

（てらだ よしたか・北海学園大学大学院文学研究科教授）